報告用紙②

関西学院大学　研究成果報告

２０１８年５月３日

関西学院大学 学長殿

所属：法学部
職名：教授
氏名：関谷一彦

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☑特別研究期間　□自由研究期間 □大学共同研究　□個人特別研究費 □博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	18世紀フランスのリベルタン文学と版画がフランス革命に果たした役割についての研究
研究実施場所	自宅
研究期間	２０１７年４月１日～２０１８年３月３１日（１２ヶ月）

◆ **研究成果概要**　(2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

「18世紀フランスのリベルタン文学と版画がフランス革命に果たした役割についての研究」を遂行するために、特別研究期間中の研究目標は４つあった。その4つとは、１）フランス革命の起源の問題について検討すること、２）リベルタン文学とフランス革命の関係について18世紀フランス文学を専門とするフランス人研究者と意見交換すること、３）リベルタン文学を分析してその影響を具体的に検討すること、４）リベルタン文学の代表的作品である『カルトゥジオ会修道院の門番であるDom B***の物語』の翻訳に着手することである。

１）については、フランス革命の起源に関する歴史家たちの議論をできるだけ丁寧にたどった。起源についての議論で重要な歴史家とは、ダニエル・モルネ、ロバート・ダーントン、ロジェ・シャルチエの三人である。ダニエル・モルネは『フランス革命の知的起源』の中で、膨大な資料を渉猟しながら、「フランス革命を決定したのは、部分的には、思想である」という結論を導く。つまり、啓蒙思想がなければフランス革命がこれほど急速に起こることはなかったと言う。こうした考えを批判的に継承しながら、ロバート・ダーントンはヌシャーテル印刷協会に遺されていた資料を中心に、革命前に「哲学書」と呼ばれていた非合法出版物（発禁本）を分析する。ダーントンの結論は、「哲学書」は、世界を転覆させることを大声で求め、1789年を準備したというものであった。この「哲学書」に含まれるのが、リベルタン文学である。しかしながら、ロジェ・シャルチエは『フランス革命の文化的起源』のなかで、ダーントンの研究成果を評価しつつも、「哲学書」のベストセラーを探すよりもそれが読者にどのように読

まれたのか（appropriation）の方が重要だと指摘する。それゆえに、シャルチエは「哲学書」がフランス革命を準備したというよりは、「哲学書」を受け入れる準備が整っていたからこそ広く読まれた、つまり「哲学書」の結果フランス革命が起こったのではなく、フランス革命が啓蒙思想を創り出し、「発明し」、定義づけたと主張する。こうした議論は、リベルタン文学がフランス革命にどのような影響を与えたのかを考えるうえで重要な研究であり、それを整理できたことは、研究課題の基礎を強固なものにするのに役立つだろう。

２）については、8月末から9月初めの2週間をかけてパリとリヨンを訪れ、研究者たちと研究課題について意見交換をした。パリでは、サド研究者のシャンタル・トマ氏の自宅に招かれ、リベルタン文学とフランス革命の影響関係について文学的な視点からさまざまな議論を行った。先行研究があまりないことから、その論証には困難が予想されるが、研究課題としては面白いという評価をもらった。トマ氏とは、論証の方法について時間をかけて話し合った。リヨンでは、ドゥニ・レノー氏と研究課題を含む18世紀フランス文学研究全般について何度も会って話し合った。また、クリストフ・カーブ氏、アンヌ＝マリー・メルシエ氏、マイケル・オデア氏とも、研究課題について意見交換した。関連図書などのさまざまな情報が得られ、実りの多い滞在であった。フランス人研究者と定期的に会って議論することは、研究の客観性を保証する意味でも意義のあることである。

３）については、フランス人研究者との議論を踏まえて、リベルタン文学の中核的作品である『女哲学者テレーズ』を分析して、この作品がフランス革命に何らかの影響を与えたのかどうか、与えたとしたらどのような点かを具体的に検証した。この検証にあたって採用した方法は、「文学的アプローチ」である。歴史家たちの資料を渉猟しながら、資料に語らせるという「歴史学的方法」ではなく、18世紀フランスに生きた「仮想の読者」がリベルタン文学の中核的作品である『女哲学者テレーズ』をどのように読んだのか、どのような点に関心をもったのかをテクストの内部に見出そうとした。また「仮想の読者」の関心は、「暗黙の作者」がテクストに漏らす主題に見られるのではないかと考え、テクストの分析を行った。なぜならば、『女哲学者テレーズ』には「暗黙の作者」が「暗黙の読者」を教化しようとする意志が見られるからである。テクストの分析から、「仮想の読者」が読書に切望するものは、「道徳、宗教、哲学」にあると考えられる。こうした分析を通して導かれた結論は、リベルタン文学がフランス革命に直接的影響を与えたことに論証にはならないが、少なくとも間接的影響を与えたことは導き出せただろう。詳細は、『言語と文化』に発表したので、そちらを見ていただきたい（関谷一彦「リベルタン文学とフランス革命―『女哲学者テレーズ』を通して―」『言語と文化』21号、関西学院大学言語教育研究センター、2018年3月）。

４）については、リベルタン文学の代表的作品である『カルトゥジオ会修道院の門番であるDom B***の物語』の翻訳を夏休み以後着手した。プレイヤッド版で160ページほどあるこの作品は18世紀にはよく読まれたリベルタン文学であるにもかかわらず、日本語への翻訳はない。リベルタン文学がフランス革命に与えた影響を考えるうえで重要な作品でもある。

以上、特別研究期間中に行った研究報告である。

以　上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内　博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。